

小池光・加藤治郎・花山多佳子・米川千嘉子  
↳ 気鋭の四歌人が輪番で執筆する特別企画

# 20世紀歌人群像

## 11 前川佐美雄

花山多佳子

間もなく21世紀。  
近代短歌から現代短歌へ…  
短歌はこの100年でどのような足跡を残してきたのだろうか。  
24人の歌人にスポットをあてて20世紀の短歌を検証する。



### 第一章

### 人と時代

前川佐美雄は明治三十六年二月五日、奈良県南葛城郡忍海村（現・北葛城郡新庄町忍海）に生まれた。記紀に見える大和忍海の地である。家は代々の地主で、長男の佐美雄は後継ぎたるべく、農林学校（現・県立吉野高校農業科）を卒業した。その大正十年、佐佐木信綱主宰の竹柏会「心の花」に入会する。佐美雄は少年時より絵を描くことが好きだった。しかし、家の支配者の祖父に止められ、絵の道具一式を捨てられたという。その後、うたをつくり始めた、と回想している。

大正十一年、祖父が亡くなり、佐美雄は東洋大学文学部に入学して上京した。「心の花」は当時、新世代による改革気運があり、編集部いしくれしごの石樽茂と交流し、作品の発表も多く、早くから新人として注目され始める。十四年、大学卒業とともに帰郷するが、家運は傾いており、一家は母の実家の奈良市に移住する。十五年、再びの上京を果たした。この年から、佐美雄の、短歌革新に向けての本格的活動が始まる。

大正十五年に「アララギ」の島木赤彦が没した。アララギ写実主義に覆われて沈滞していた大正期の歌壇にも、大正末より、新しい時代の動きが現れて来ていた。プロレタリア文学運動、モダニズム、※1ダダイズム、シュールリアリズムといった詩の影響を受けて、反写実、口語化運動、自由律などが堰を切ったように広がったのが、昭和初期であった。佐美雄も昭和三年、新興歌人連盟結成に準備委員として参加、四年にプロレタリア歌人同盟が創刊した「短歌前衛」

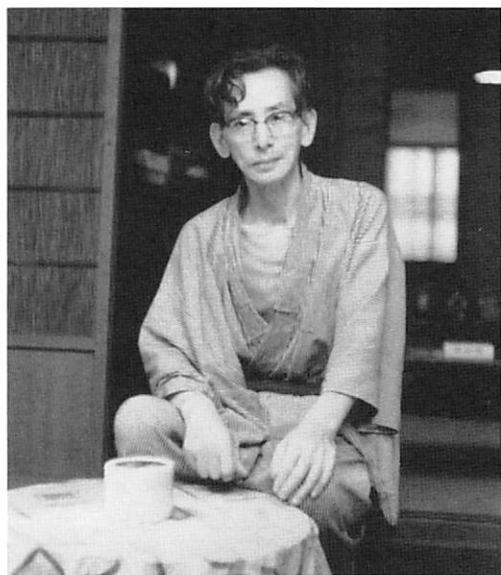
に参加、また石樽茂と雑誌「尖端」を創刊するなど、活発な動きを見せる。しかし、この年でプロレタリア短歌からは離れた。

こうした動きの中で、昭和五年、二十七歳のとき第一歌集『植物祭』が「心の華叢書」として出版された。装幀はシュールリアリズムの新進画家古賀春江、序文佐佐木信綱。口語調で反写実、反常識を打ち出した特異な実験歌集である。この年、腸チフスで三か月入院。渡欧計画が頓挫した。

昭和七年に父が亡くなり、八年、余儀なく奈良に帰住する。佐美雄三十歳。九年「日本歌人」創刊。阿部知二、小林秀雄、安田與重郎、中原中也、春山行夫などが稿を寄せ、芸術派を標榜する雑誌となった。この当時の作品は、『白鳳』に収められ、後に出版されている。十二年結婚。十四年、安田與重郎企画の浪漫叢書から選集『くれなる』を出版。このころ「日本浪漫派」の人々と親交関係にあった。作風も文語定型に回帰し始める。

昭和十五年、第二歌集『大和』を出版。十六年『白鳳』、十七年『天平雲』とたてつづけに歌集を出版し、戦争になだれ込んでいく時代、作品は異様なまでの充実を示す。佐美雄のうたのピークはこの時期にあり、多くの名歌が生まれた。太平洋戦争が始まると、大いに愛国歌、戦争昂揚歌をつくり、十八年に『日本し美し』として出版する。戦後、二十一年に出版された敗戦時歌集『紅梅』とともに、佐美雄は厳しい批判に曝されることになった。翌二十二年『積日』出版。かつての佐美雄の作風は影をひそめ、日常の現実心に心を添わせ、悲哀の感が濃い。二十三年、農地解放により、田畑池床の一切を失った。

二十九年、佐美雄は「短歌研究」に「鬼百首」を発表した。戦前



奈良の自宅で（昭和37年）

の歌風が蘇るかの大作であったが、「反響はかまびすしかった。ほぼ否定に傾き、雑言に近いのも少くはなかつた」と、塚本邦雄は後に記している。

「鬼百首」は十年後に出版された『搜神』に収録されている。四十五年、六十七歳のとき、奈良を離れ、神奈川県茅ヶ崎に居を移す。三十七年ぶりに大和を出たのである。翌四十六年『白木黒木』を出版。追空賞を受賞した。これが生前の最後の歌集となった。平成元年、日本芸術院会員となる。平成二年、急性肺炎にて死去。八十七歳。没後、平成四年、長男前川佐重郎の手により『松杉』が出版された。

## 第二章

### 歌と時代

昭和の幕開けと同時に佐美雄の歌はその独自性を発揮した。それ以前の初期の歌は『春の日』に収められているが、アララギ風と大きく区別は出来ない。それを自ら「これこそが今日の全歌壇の傾向だ」「若くして年寄りじみた古典派の悪趣味」と否定して、「人情をしりぞけ、常識を追ひやる時、勢ひ人間の詩情は解放される」（後記）として、世に表したのが『植物祭』であった。ダダイズムやシュール

ルリアリズムの、非合理、無意識に向かう精神は、まず口語体で、苛立ちやもどかしさ、欲求として「あられもない姿」で歌い出されたのである。

昭和初期に広がった短歌新興運動は、従来の文語に対しては口語定型に対して、三十一文字にこだわらない自由律、といった、いわば、なし崩しに短歌でなくなる方向にあった。散文化、短詩化だったのである。佐美雄は口語や散文調を取り入れつつも、非定型化とは遂に相容れなかった。定型を守ってこそその短歌革新というのが佐美雄ら新芸術派（石川信雄、木俣修、齋藤史など）の立場であった。

奈良に帰住する前後の作品を収めた第三歌集『白鳳』までは、しかし、西欧的な詩のイメージに託して、感覚をシュールな方法で短歌に導入したという色彩は鮮明である。いわゆるモダニズム短歌である。口語調は、詩の表現としての効果を發揮している。それが次の『大和』からは、がらりと印象が違う。文語定型の古典的な調べ、短歌形式の力によって、佐美雄の、そして時代の無意識が引き出されてくる。戦争直前の『天平雲』まで、その危うさと美しさは不思議な緊迫感を湛えている。日本浪漫派と接近した時期でもあった。佐美雄の歌集は全部で十二冊ある。戦前を中心として鑑賞してみたい。

床の間に祭られてあるわが首をうつつならねば泣いて見  
るし  
「植物祭」

自分の首を自分が見ているという奇怪なうた。今でこそ、さほど驚きはしないが、こういう超現実を歌にすることは、それまでなかった。アララギの写実は揺るぎない自己から対象や感情をうたう。

ここでは物のように自己も対象化されている。「床の間に祭られてある」が異様だが、戯画的で、ナンセンスで可笑しい。佐美雄の一つの特徴は、こういうナンセンスな奇妙さにあり、常識的な感覚をぐらっと揺らす。「うつつならねば」とわざわざことわり、「泣いて見てあし」と非力を誇張した言い方をするのも、独特な可笑しさがあろう。「ひじやうなる白痴の僕は自転車屋にかうもり傘を修繕にやる」のように、白痴、狂気という自意識は、当時のシュールリアリズム系の詩人の流行でもあり、反逆の意思表明でもあったが、「床の間」のうたは、その影響だけではない佐美雄自身の持ち味も出ている。

ぞろぞろと鳥けだものをひきつれて秋晴の街にあそび行き  
たし  
「植物祭」

これが、子供達とか、人間であれば、平凡すぎる口語歌であろう。「ぞろぞろと」「秋晴の」みな、思い切って平俗な言い方だ。「植物祭」は「すつぱりと着物着かへて」とか「とてもすばらしく気が晴れてをり」など日常の口語発想をさかんにとり込んでいる。そこに「鳥けだもの」一語が入ったとたん、「ぞろぞろと」が異様にひびき、シュールなイメージが出現する。こんな意味のない気分をうたうということは、当時までの生真面目な歌にはなかった。文語と口語が発想的にも、表現的にもいりまじり、それが変てこな魅力を持つのも佐美雄の歌の特徴である。

うまれた日は野も山もふかき霞にて母のすがたが見られ  
なかつた  
「白鳳」

『白鳳』は『植物祭』に較べると、シュールな方法が詩的な文体で

消化されてきた、美しい印象がある。こういう内容は短歌では表現しにくい。うまれた日に霞が見えるはずはないし、だから母が見られないというのも、詩では通用する。「見られなかった」の口語調での余韻の効果は歴然としていよう。野が霞で何も見えないというモチーフ（題材）は、『大和』まで繰り返し歌われる。それは「春がすみいよ濃くなる真昼間のなにも見えねば大和と思へ」（『大和』）に一つの到達を得る。大和の国原の歴史の遙けさと、自己喪失感が重なった心象イメージである。

### 春の夜にわが思ふなりわかき日のからくれなるや悲しか りける

『大和』

『大和』から文語への復帰が目立ってくる。名歌としてあげられることの多いうたである。単純にして、格調高い。「わかき日」と言つて「からくれなる」と色だけの一語で回想し切ったところが、卓抜である。この一語で名歌になってしまう。何故その言葉を得たのか説明つかないのが佐美雄のうたなのである。二句切れで、以下のカ音の韻のひびきも美しい。この歌、昭和十四年作で「韓紅」と題する一連に入っているが、この一連は戦争に向かう思いが濃い。とすると「わかき日のからくれなる」は若い人々の、であるかもしれない。「ひとたびは音立てて清く流らへとあるひは願ひ沼の辺に立つ」が一首目で、戦争への心情を籠らせている。

### 西方は十万億土かあかあかと夕焼くるとき鼠のこゑす

『天平雲』

『白鳳』までは「白」「青」が多いのだが、戦争に近づく時期、「赤」

をあらわす用語が多くなってくる。絵画の好きな佐美雄の色彩感覚は、歌にもごく鮮やかだ。「西方は十万億土か」という唐突な大きな初句、それに対して地上の卑近な「鼠のこゑ」がこれもまた突然出現する。それをつなぐ夕焼けが異様にまがましい。シュールな方法が、伝統的文語定型の短歌で佐美雄独自のものを導き出すに至っている。「あかあかと紅葉を焚きぬいにしへは三千の威儀おこなはれけむ」とも歌う。戦争の空気のなかでの、危うい緊張感と、喪失感が交差する。これも昭和十四年作。

### いつしかに天のはら冷えてをりをりはわれにかなしき鳥 かげわたる

『積日』

『積日』は終戦の年の四月から翌二十一年十月までの歌を収める。生活や自然に寄せて落魄の身を詠嘆する悲哀感が滲む歌集である。戦前までの佐美雄調はもはやない。かつて自己否定した『春の日』の写実的詠風に戻った感がある。中でこの歌は、ふと口をついたままに完成した趣きがあって、調べが何ともいえない。「いつしかに」「をりをりは」といった副詞の使用は佐美雄の好むところ。敗戦一年後の秋の作で、沈潜した哀しみが鳥かけとなってよぎる心象が、透明感をもって歌われている。

### 靄くらく寒きあしたをつぶやきて庭に古繩切れを拾へり

『白木黒木』

### 正月の二日の午後を遠出して古国飛鳥の石の上ををる

『白木黒木』は、『搜神』の後七年ぶりに出され、生前最後の歌集と



奈良の自宅の庭で（昭和42年）

なった。六十七歳のときの出版で、八十七歳で亡くなるまで歌集は出していない。前半期に較べて、後

半の歌集は非常に少なかった。作風は平明な滋味を湛えるものとなっているが、平凡には墮さない佳品が多い。この歌は、

「冬漠漠」と題する二首。共に読んで味わい深いので、並べて上げる。一首目、「霽くらく」は佐美雄らしい直感的な入り方である。何かつぶやきながら「古縄切れ」を拾う老人、こんな無意味な場面こそ佐美雄にふさわしい。そして二首目、「遠出して」「石の上ををる」が、気がついたらいきなりそこにいたかのように、面白い。どちらも、無意識の行動を感じさせ、そこに「古縄切れ」「古国飛鳥」という言葉が実に魅力的に作用している。二首目が二日だから一首目は元旦の歌かもしれない。ならば一層、興がある。

## 第三章

### 短歌史におけるポジション

佐美雄はとかく異端の歌人とか、反骨の鬼才などと呼ばれて来て短歌史の上では別格扱いされることが多かった。また、昭和初期から戦後にかけての作風の移行が、時代の流れと典型的にシフトしていったために、批判、否定の対象になってしまったという不幸な過程

があった。しかし、その作品の特異な魅力と、時代との関係は、現在いっそう興味深い問題である。また、従来の短歌に反逆した口語歌から、文語定型へという回帰の中に、短歌とは何かという様式に関わる葛藤が全て含まれていて、現在の短歌状況にも切実な問題を投げかけているといえよう。

佐美雄の歌および主宰する「日本歌人」は戦後、塚本邦雄、山中智恵子、前登志夫といった歌人達を輩出する母体となった。塚本邦雄らの前衛短歌運動においては、佐美雄は、戦前最も早く西欧のシユールリアリズム、詩の手法を取り入れ反写実を實踐した歌人として、再評価された。前衛短歌の源流、という位置づけは、以来、定着してきたといえる。しかし、佐美雄の説明のつかない不可解さは、前衛短歌とはまた異なるように思われる。前衛短歌は、比喩の使い方、一首の構築の仕方など、計量は周到で、意識的である。それに対して、佐美雄の歌の成り立ちは、もっと計算外の非合理なものであろう。その意味で佐美雄はシユールリアリズムの精神そのものを作歌に取り入れたといってもいい。もともと多作の人であり、失敗作も多いが、その中に突如、名歌を生む。唐突、偶然の言葉の働きによって、無意識が浮かび上がってくるようなところがある。詩歌というものは、合理的なものでなく、現実を一拳に虚にするナンセンスを含んで然るべきなのだ、ということ、佐美雄のうたは思いつきで書ける。

（はなやま・たかこ「塔」会員）

※1 ダダイズム 第一次大戦中スイスでおこった一主義。芸術的伝統を否定。  
※2 シュールリアリズム 超現実主義。

※次号は齋藤史（米川千嘉子筆）です。